

序 文

職業訓練、特に養成課程は教育の一つとして考えることが出来る。教育は一般に学ぼうとする個人の意欲と教えようと云う社会の要請とが釣り合った所に成立する。今日、職業訓練を推進しようとする社会の要請については若年労働力の不足や人口動態といったかたちで基礎的資料も次第にととのって来つゝある。しかし、一方の“個人”の側の事情についてはその基礎的資料は極めて貧しいのが実情である。すなわち、

「職業訓練所に入所して来る訓練生はどのような素質をもっているのか？」

「その素質は他のコースを歩む同年者達に較べてどのような位置にあるのか？ それらの地域、職種別な差は如何？」

「彼らはどんな職業興味をもって入って来るのか？」

「彼らの家庭環境の実体は？」

などである。

これらについては今日社会的通念となっている先入観は存在する。たとえば「彼らの素質は他の高校生に較べると低い」、「彼らは貧困家庭の子弟である。」、「彼らは知能的な能力は低い、機械的な手作業には適している」等々……。しかし、我国の近年の社会的情勢、例えば高校進学率の異状な上昇を考えてみると、それは実は素質的に極めて低い子弟でも高校に進学していることを示すに他ならない。従って、訓練生と高校生の平均素質は相対的に接近しつつあると考えられる。また、我国全体の中産階級化の趨勢の下で、彼らを一がいに貧家の子弟と見做し得るかどうかにも疑問が残る。更に注目すべきは、単にMassとしての平均素質の論議ではなく、彼らの中にエリートたり得る素質の持ち主がどの程度分布しているかも問題になる。すなわち素質の分散度である。将来、ブルーカラーの前途を青天井として道を開くよう制度的配慮が実をむすぶ場合、この数値は重要な指標になるであろう。また、訓練所での訓練方法自体にとっても、素質の分散度は重要な参考値である筈である。

このように職業訓練を受ける“個人”の側の事情、特に素質については従来の社会通念を再検討し、具体的な数値の中から正しい実体の把握を図る時点にあると考えられる。本調査はこのような意図のもとに本校調査研究部において、安江研究員を中心として企画、実行されたものである。

本報告は、1部、2部、3部から成っている。すなわち、第1部では、素質の統計的解析を行ない、第2部に、素質との関連において訓練生の職業興味を分析し、最後に第3部として、実際に調査にあたった部員の現地での見聞記を含めてケーススタディ的に集録した。

本調査は43年度に第1回として行なわれたもので、未だ完璧なものとは云いがたいかもしれないが、一般教育界でとかく等閑にされ勝ちな、職業訓練所訓練生の素質の実体に対して貴重な資料を与えたと云い得るであろう。この結果が、職業訓練界、教育界において、行政、訓練、また教育に活用されることを祈ってやまないものである。

(44. 3. 14)

調査研究部長 宗 像 元 介

調査結果の概要と提言

調査の詳細を述べるにさきだって、まず結果の概要を明らかにし、これから引き出し得る10項目の提言を述べたい。

1. 結 果

- 第1点：総訓生の知能の程度は、その平均値が、知能偏差値で49であり、“普通”の知的能力をもった者が多いこと。
- 第2点：その平均値は公立高校の生徒のそれと比較するとやゝ低いが、私立高校の生徒と較べてほぼ同程度であること。
- 第3点：知能の高い者から低い者まで、その分散が極めて大きいこと。（このことは公、私立高校についても同様）。
- 第4点：知能偏差値で57以上という高い知能水準の者が、中卒者で15%も含まれており、これらは、能力的には大学教育を受け得る可能性をもつものであること。
- 第5点：総訓生の知的素質は、地域差による違いは認められず、設置職種によって左右されていること。
- 第6点：知能の高い者でも、中学校時代の学業成績はあまりふるわず、家庭の経済的理由等から能力が充分に開発されていないものが多いこと。
- 第7点：職業適性は、全体的にみると基準の100点に近く、訓練職種での適性としてまずまずの性能得点を示している。しかし、個々人についてみると、26～33%の者が問題を残していること。
- 第8点：職業興味検査結果からみて、彼等の要求水準それ自体がやゝ低くなっていること。
- 第9点：中学校においては、職業訓練所に対する認識不足と偏見が認められること。

2. 提 言

- 第1点：結果の第1、第2、及び第3点に明らかなように、最近の高校進学率上昇の傾向を直接総訓生の素質低下に結びつけて考えることは危険であり、そのような偏見から訓練の到達目標をことさら下げたり、又、訓練効果のあがらない原因を訓練生の素質にのみおしつけることは誤りであること。
- 第2点：しかしながら第1の提言は全体としてみた場合のことであり、訓練生を個々にみた場合には、結果の第3点に示すように大きな個人差がみられ、その個人差に応じた教育訓練の内容の編成並びに指導方法が考えられなければならないこと。
- 第3点：結果の第5点から、設置職種の決定にあたっては、訓練生の知的水準を高め、職業訓練所の“威信”——（Prestige）を高めるといふ見地からの検討も必要であること。
- 第4点：結果の第6点に示すように、高い知的能力をもつ訓練生で、中学校時代に良い学業成績をあげ得なかったものが多いが、逆に云えば、彼らには、総訓における教育訓練によ

て、眠っている能力（ポテンシャルアビリティ）を目覚めさせる高い可能性を有している
と認められること。

第5点：しかしながら上記第4点の提言にいう“可能性”を実現させるためには、経済的事情は
しばらくおくとして、消極的な性格、例えば自ら低くおいている要求水準等に対処する
きめこまかな指導が必要であるとともに、「自分だってやれるんだ」という自覚と自信
を持たせるような訓練方法が必要であること。

第6点：結果の第3点及び提言第5点の一方策として、訓練生各人の進度に応じた学習方式の一
つであるプログラム学習方式は、今後充分に研究を重ねていくべき課題であること。

第7点：結果の第6点、第8点から、指導にあたる者は常時訓練生とみじかに接触する機会を多
くすることは勿論、例えばカウンセラー制度の設置等が望まれること。

第8点：結果の第7点から、職業適性検査の判定基準並びに進路指導のあり方について検討の余
地があること。

第9点：結果の第9点から、進路の決定は中学校の示唆によるところがかなり大きい。このため、
中学校とりわけ進路指導係等と訓練所側との連絡をより一層密にする必要があること。

第10点：中学校から総訓への進路指導をし易くするため、且つ又、入所訓練生に自負と自信をも
たせるため、組織的・制度的問題、例えば総訓の名称改革等再考の要があること。

4 3 年度発行の「職業訓練に関する調査研究報告書」

14号	技能訓練の過程について(英訳)	内田悦弘
15号	総合職業訓練所訓練生の素質調査	安江節夫・木村力雄 石橋泰彦・富田康士 戸田勝也
16号	技能習熟の数学的考察	古賀一夫
17号	米国及びソ聯における職業・技術教育	内田悦弘

調査研究報告書バックナンバー

年度	内 容
37年度No.1	中央職業訓練所及び附属職業訓練所の訓練生の素質並びに選考の方法に関する考察 単純反復作業の練習曲線と準備性適時性に関する予備実験の結果報告 転職者訓練実態調査結果報告
38年度	年令と単純反復作業に現われる練習効果の関係 旋盤作業及び仕上作業に関する技能訓練効果測定 機械工基本実技訓練調査
39年度No. 1	機械工電機組立工基本実技訓練実態調査 技能訓練効果測定(自動車ガソリンエンジン整備、電気配線作業) 米ソの新しい職業訓練理念(紹介) 米国の人的能力開発訓練法(M. D. T. A.)について
39年度No. 2	技芸、技能的職業の練習開始時期に関する調査 中高年令者の雇用並びに労働能力に関する調査 技術革新に伴う技能労働の変化に関する調査 技能の習熟に関する研究(その1)一訓練期間における旋削技能の変化一
40年度No. 1	全国総訓技能試験に基づく技能度測定
40年度No. 2	訓大附属総訓修了者の実態調査報告 旋盤訓練における技能習熟の過程

年 度	内 容	
40年度No.2	技術革新に伴う技能労働の変化に関する調査(2報) 熟練技能労働者の就職年齢・学歴の調査 西独逸の職業教育 フランスの職業訓練と技術教育	
41年度7号	高等学校卒業を入所資格とする事業内訓練の実態・・・安江 節夫・富田 康士 旋盤訓練における技能習熟の過程について(第2報)・・・戸 田 勝 也 技能(普通旋盤作業)の通し評価法について(第1報)・・・古 賀 一 夫 一寸法公差内のねらいどころと仕上げ可能な最小公差— 技能(普通旋盤作業)の通し評価法について(第2報)・・・古 賀 一 夫 —製作寸法誤差分布の正規性と寸法精度の技能評価— 技能に関する研究についての—考察・・・・・・・・・・・・・・石 橋 泰 彦 訓練成績と職場適応に関する分析的考察・・・・・・・・・・・・・・岡 村 一 成 衝動傾向と職業適性に関する—研究・・・・・・・・・・・・・・岡 村 一 成 英国の技術教育と産業訓練法の特徴(紹介)・・・・・・・・・・・・内 田 悦 弘 生産工学におけるサンドウィッチ方式学位コースの未来像(紹介)・・・ ・・・・・・・・・・・・内 田 悦 弘 英国工科系大学におけるサンドウィッチ方式 ディプロマコースの技術教育(紹介)・・・・・・・・・・・・内 田 悦 弘 —主として英国ノーサンプトン、カレツチの実情紹介を中心に— スウェーデンにおける職業指導員の訓練について(紹介)・・・戸 田 勝 也	
42年度8号	総合職業訓練所における高卒訓練生と中卒訓練生の比較・・・安 江 節 夫 富 田 康 士	
9号	技能(普通旋盤作業)の通し評価法について・・・・・・・・・・・・古 賀 一 夫 —第3報・技能時間の累積分布の型と時間の技能評価—	
10号	通し評価法による技能評価の—一例・・・・・・・・・・・・・・古 賀 一 夫 —42年度全国総訓技能競技大会・旋盤作業—	
11号	ヨーロッパの技能者養成・・・・・・・・・・・・・・内 田 悦 弘	
12号	技能の習熟構造に関する研究(1)・・・・・・・・・・・・・・手 塚 太 郎	
13号	「学制」に関する—考察・・・・・・・・・・・・・・木 村 力 雄 —技能軽視の風潮は何故生じたか—	

4 3年度発行の「職業訓練に関する調査研究報告書」

14号	技能訓練の過程について(英訳)	内田悦弘
15号	総合職業訓練所訓練生の素質調査	安江節夫・木村力雄 石橋泰彦・富田康士 戸田勝也
16号	技能習熟の数学的考察	古賀一夫
17号	米国及びソ聯における職業・技術教育	内田悦弘

調査研究報告書バックナンバー

年度	内 容
37年度No.1	中央職業訓練所及び附属職業訓練所の訓練生の素質並びに選考の方法に関する 考察 単純反復作業の練習曲線と準備性適時性に関する予備実験の結果報告 転職者訓練実態調査結果報告
38年度	年令と単純反復作業に現われる練習効果の関係 旋盤作業及び仕上作業に関する技能訓練効果測定 機械工基本実技訓練調査
39年度No. 1	機械工電線組立工基本実技訓練実態調査 技能訓練効果測定(自動車ガソリンエンジン整備、電気配線作業) 米ソの新しい職業訓練理念(紹介) 米国の人的能力開発訓練法(M. D. T. A)について
39年度No. 2	技芸、技能的職業の練習開始時期に関する調査 中高年令者の雇用並びに労働能力に関する調査 技術革新に伴う技能労働の変化に関する調査 技能の習熟に関する研究(その1) - 訓練期間における旋削技能の変化 -
40年度No. 1	全国総訓技能試験に基づく技能度測定
40年度No. 2	訓大附属総訓修了者の実態調査報告 旋盤訓練における技能習熟の過程

年 度	内 容	
40年度No.2	技術革新に伴う技能労働の変化に関する調査(2報) 熟練技能労働者の就職年令・学歴の調査 西独逸の職業教育 フランスの職業訓練と技術教育	
41年度7号	高等学校卒業を入所資格とする事業内訓練の実態・・・安江 節夫・富田 康士 旋盤訓練における技能習熟の過程について(第2報)・・・戸田 勝也 技能(普通旋盤作業)の通し評価法について(第1報)・・・古賀 一夫 一寸法公差内のねらいどころと仕上げ可能な最小公差一 技能(普通旋盤作業)の通し評価法について(第2報)・・・古賀 一夫 一製作寸法誤差分布の正規性と寸法精度の技能評価一 技能に関する研究についての一考察・・・・・・・・・・・・石橋 泰彦 訓練成績と職場適応に関する分析的考察・・・・・・・・・・・・岡村 一成 衝動傾向と職業適性に関する一研究・・・・・・・・・・・・岡村 一成 英国の技術教育と産業訓練法の特徴(紹介)・・・・・・・・・・・・内田 悦弘 生産工学におけるサンドウィッチ方式学位コースの未来像(紹介)・・・ ・・・・・・・・・・・・内田 悦弘 英国工科系大学におけるサンドウィッチ方式 ディプロマ・コースの技術教育(紹介)・・・・・・・・・・・・内田 悦弘 一主として英国ノーサンプトン、カレッヂの実情紹介を中心に一 スウェーデンにおける職業指導員の訓練について(紹介)・・・戸田 勝也	
42年度8号	総合職業訓練所における高卒訓練生と中卒訓練生の比較・・・安江 節夫 富田 康士	
9号	技能(普通旋盤作業)の通し評価法について・・・・・・・・・・・・古賀 一夫 一第3報・技能時間の累積分布の型と時間の技能評価一	
10号	通し評価法による技能評価の一例・・・・・・・・・・・・古賀 一夫 一42年度全国総訓技能競技大会・旋盤作業一	
11号	ヨーロッパの技能者養成・・・・・・・・・・・・内田 悦弘	
12号	技能の習熟構造に関する研究(1)・・・・・・・・・・・・手塚 太郎	
13号	「学制」に関する一考察・・・・・・・・・・・・木村 力雄 一技能軽視の風潮は何故生じたか一	

発 行 者 職 業 訓 練 大 学 校

調 査 研 究 部 長 宗 像 元 介

職 業 訓 練 大 学 校

東 京 都 小 平 市 小 川 西 町 2 2 6 0

T E L 0 4 2 3 (4 1) 3 3 3 1